

春光歴史探訪図

春光の歴史を知ることにより
春光を誇りに想うマップ



春光台公園から春光を望む

【作 成】 春光まちづくり推進協議会 春光歴史探訪図事業実行委員会
【協 力】 地域情報をいただいた春光地域の方々 旭川の歴史的建物の保存を考える会
古建築研究家 間藤悠史 郷土史探求家 田中洋人 旭川市立北鎮小学校
北鎮記念館 北海道護国神社 旭川市彫刻美術館 井上靖記念館
グラフィックデザイナー 鶴川拓也
【作成年月】 2025年11月

春光の名の由来

「春光」の名は、旭川に第七師団が編成完結した翌年、『明治36年に泉法輪少佐が春光台と名付けた』との新聞記事があります。（小樽新聞 大正14年1月26日付）
また、この当時の旭川市街図にも現在の春光台公園付近に『春光臺（台）』と記載されていることから、この時期に先ず春光台の名が付けられたようです。師団や街全体、大雪山連峰が見渡せる眺めの良い高台である事から特にこのような名が付けられたのでしょう。②徳富蘆花（ろか）や③若山牧水などの著名人もここを訪れています。これをきっかけにふもとの師団地域を指して春光（町）の名が通称として用いられるようになりました。

町名の変遷

春光地域の元々の字（あざ）名は近文○線○号でした。元来は農地としての広い区画割です。ここに近文1線～4線、2号～6号間が師団衛戍地（えいじゅち）となりましたが、この字名のままでは不都合なため師団各連隊・大隊の戸建て官舎区域に1区から6区までの区画名称が割り当てられました。歩兵第26連隊の戸建て区画が1区、同27連隊が2区、28連隊が3区、騎兵第7連隊が4区、野砲兵第7連隊が5区、輜重（しちょう）兵・工兵第7大隊が6区、といった具合です。これが前述の春光の名と相まって用いられますが、あくまで師団衛戍地独自の呼称でした。

※衛戍地（えいじゅち）：軍隊の恒久的な施設が置かれた地域のこと

※輜重兵（しちょうへい）：現在で言う後方支援部隊のこと

正式な町名として付けられたのは、戦後軍隊が解体され、旧師団跡が引揚者用の住居地に充てられたため新たな住所が必要となった昭和26年の事です。新たな町名を付けるに当たっては戦前からの通称を尊重して春光町とし、これに1区から6区の一部区割を変更・拡大してそのまま用いて春光町1区～6区としました。昭和31年には春光町各区ごとに条丁方式が採用され、新たに区画整理された住吉町が加わりました。

不可解なのは昭和40年に春光町4区がただの4区に町名変更された事です。これ以降現在の住居表示が実施されるまで4区のみが春光の名を冠していませんでした。また、昭和49年には春光町5～6区のみが町を取って春光5～6区に変更され、春光町全体として非常に統一性に欠ける町名になってしまいました。

平成15年からは1区2区を皮切りに順次住居表示が実施され、4区を含む全ての区が平成20年までに住居表示が実施されて春光○条○丁目○番○号となり、明治の師団設置以降長年定着していた「区」の区割と呼称が廃止されました。

旭川市における開拓と防衛の歴史

屯田兵は、北海道の防衛と開拓、更に、廃藩置県で職を失った士族の救済が目的で、明治8年の札幌琴似屯田が始まり、明治32年までに約4万人の兵士と家族が全国から移住しました。ただし明治24年以降上川の3兵村からはそれまでの士族屯田から平民屯田となっています。

上川の屯田兵村とほぼ平行して旭川市街地の造成と移住も始まり、現在の中心部の原型が急速に出来上がって行きましたが、そのさなか明治29年に札幌にて陸軍第七師団が創設され、新たに北海道に敷かれた徴兵制の下で鷹栖村（現在の春光町）に移駐された事により多くの人や物が集まり「軍都旭川」が誕生します。

そしてこの第七師団の設置こそが春光町の歴史の始まりと言えます。

1889年(明治22年)	第2代北海道庁長官永山武四郎、初代長官岩村通俊が提唱していた「北京構想」を再建議、上川への離宮設置が閣議決定される
1890年(明治23年)	離宮の名称として「旭川」の名が誕生 旭川村、永山村、神居村の開村告知 永山屯田兵村工事、旭川の市街地道路の造成が始まる
1891年(明治24年)	屯田兵、永山村に入植
1892年(明治25年)	旭川市街地区画の民間への貸下げ開始 屯田兵、旭川村に入植（後に東旭川村） 鷹栖村、神楽村の開村告知
1893年(明治26年)	屯田兵、永山村字トオマに入植（後に当麻村）
1894年(明治27年)	木橋の鷹栖橋（旭橋の前身）を架橋 日清戦争勃発、屯田兵を招集し臨時第七師団を編成（渡航前に終戦）
1896年(明治29年)	● 正規の第七師団を札幌にて創設、初代師団長は永山武四郎 第七師団の「七」は「なな」ではなく、「しち」と読む。明治天皇が初代師団長に永山武四郎を任命した際、「しち」と呼んだのが由来とされている
1898年(明治31年)	旭川-滝川間鉄道開通（官営上川線）小樽まで鉄路が繋がる
1899年(明治32年)	● 第七師団、旭川（鷹栖村）に移駐決定、用地買収・工事着手 近文信号所から師団用地まで専用線が敷かれる（後の大町支線）
1900年(明治33年)	● 第七師団、編成完了した部隊から順次旭川に移駐開始 旭川村を旭川町に呼称変更
1901年(明治34年)	● 第七師団司令部が旭川へ移駐 偕行社付属北鎮尋常小学校開設（師団将校らの子弟学校）
1902年(明治35年)	● 偕行社の完成をもって第七師団の建設・移駐が完了、師団兵力の大半を一か所に集約するという陸軍最大の衛戍地（えいじゅち）が完成し「北鎮師団」「軍都旭川」と呼ばれるようになる 師団を含む近文原野6号までを鷹栖村から編入、旭川町に一級町村制が施行される
1904年(明治37年)	鷹栖橋を鉄鋼トラス式吊橋に架け替え「旭橋」と改める日露戦争勃発、第七師団も旅順攻撃に参戦、甚大な犠牲を被る
1910年(明治43年)	● 上川馬車鉄道、旭川駅～師団練兵場周回路線が開通
1914年(大正 3年)	区制施行「旭川区」となる
1922年(大正11年)	市制施行「旭川市」となる
1930年(昭和 5年)	● 旭川市街軌道・師団線の開通（当初は旭橋を渡れず途切れていた）
1932年(昭和 7年)	現在の旭橋が完成（電車軌道が敷設され師団線が繋がる）
1936年(昭和11年)	牛朱別川切り替え埋立て跡に常磐広場・ロータリー完成北鎮兵事記念館（現護国神社平成館）が開館
1941年(昭和16年)	日本軍がハワイ真珠湾を攻撃、太平洋戦争開戦
1945年(昭和20年)	太平洋戦争終結、敗戦により軍は解体される 「師団通」を「平和通」と改称
終戦から数年間	樺太や満州などの外地居住者が続々と本土に引揚げて来る。 旭川市は旧衛戍地に66戸の急造長屋を建てると共に、連隊兵舎や官舎を開放して836世帯約3700人を収容するも足りず、22両の鉄道廃車を使った「列車住宅」なども出現した
1951年(昭和26年)	● 旧衛戍地の通称だった「春光町」を正式な町名とする 旧練兵場跡には、警察予備隊、保安隊を経て1954年(昭和29年)に現在の陸上自衛隊第2師団が発足した

列車住宅のことー戦後住宅難的一幕ー

私が生まれ育った旭川市春光町1区（現在の春光6条1丁目）の9条あたりに廃車となった鉄道車両を再利用した住居が立ち並んでいた。歴史的には客車住宅と称されているようだが、地域の人たちは列車住宅とか汽車住宅とか呼んでいた。私の家自体が旧第七師団の官舎跡で、戦後春光町一帯は師団官舎群だった。師団官舎は住んだ人の階位の違いで家の造りもいろいろ種類に分かれていたが、いずれも戦後の混乱期に家族が暮らすうえでは申し分のない建物だった。その師団官舎群の西端の一角に突然、廃列車が立ち並んだ。

旭川市史などの記録によると、ここには22両の鉄道廃車が設置されたという。昭和26年6月頃に運搬が始まり、10月には入居が完了したようだ。入居した世帯は44というから、1両に2世帯が入った計算だ。この時は入居申し込みが50件あって抽選が行われたという。

当時、私はまだ1歳半くらい、兄は5歳。自宅の近くを列車を積んだ馬車が進んでいる写真が残っている。2頭で引き、馬車の脇には近所の子供たちが集まり、何事が起きているのかという様子で見守っている写真だ。父が地元の新聞社に勤めていたので、廃列車運搬を伝える新聞記事に載った写真をもらってきたのだろう。

戦後の旭川は、外地、主に樺太からの引揚者であふれ、著しい住宅難となった。行政はこれを解消するため旧師団の施設活用や市営住宅の建設を進めたが、とても追いつくものではない。雨露をしのげるものなら何でも利用しようと廃列車や廃電車に目を付けたのもうなづける。

私の記憶に残る列車住宅は、100㎡四方ほどの狭い範囲に密集していた。22両もあったとは気が付かなかったが、列車と列車は3～4mの間隔で隣合わせに設置され、1列に4～5両、それが5列ほどあった。列車の内部は真ん中で仕切られ、各列車からは2本の煙突が3～4mほどの高さで空に伸び、1両に2世帯入居している様子がわかった。もちろん列車に車輪はなく、石を土台にして水平に置かれていた。

この地域の校区は北鎮小学校だったから、列車住宅の子供たちも私と同じ学校に通っていたのだと思うが、おそらく同級の子供はいなかったのだろう、列車住宅の部屋を訪問した記憶はない。そのため内部がどんな造りだったのか見たことはない。

私の知る限り、ほとんどが昭和40年代には解体されたようだが、それでも昭和50年代まで1、2両は残っていた。姿は色あせ、廃屋のようになっていたが、そこに列車住宅群があったという痕跡があった。最近、現場付近を見て回ったが普通の住宅街で今では何の面影もない。列車住宅の登記や権利がどうなっていたのかかわらないが、自己所有の人はそこに新しい住宅を建てているはずだ。

2025年4月 村上史生（元北海道経済編集長）

列車住宅ってご存知ですか？

地域の人々のコメント

●私が師団官舎で過ごしたのは今から約62年前、結婚して、義父と義母と夫と同居して約15年間二世帯で暮らしていました。

官舎には、大きな玄関があり、コンクリート床で引き戸でした。家の周りには垣根のような木々が植えていました。庭には梨やサクランボやスモモもありました。

窓は一枚窓で、ストーブがあった部屋は茶の間のみのので、冬はとても寒かったです。屋根は自然に雪が落ちるので、雪下ろしなどはしなくても大丈夫でした。

部屋は全部で8室あり、台所の横には昔、お手伝いさんがいたという小さな（4畳半）部屋がありました。奥の座敷はひとつ8畳ほどあり、トイレは、お客様用と家族が使うのと2か所ついていました。お客様用だったので全く使用することはなかったですが義母が毎日掃除し、外に面した縁側も朝掃除しても夕方には砂埃が入っていたようで、そこも義母は夕方丁寧拭き掃除しました。

几帳面な義両親でしたので、大事にされていた家や庭は喜んでいました。

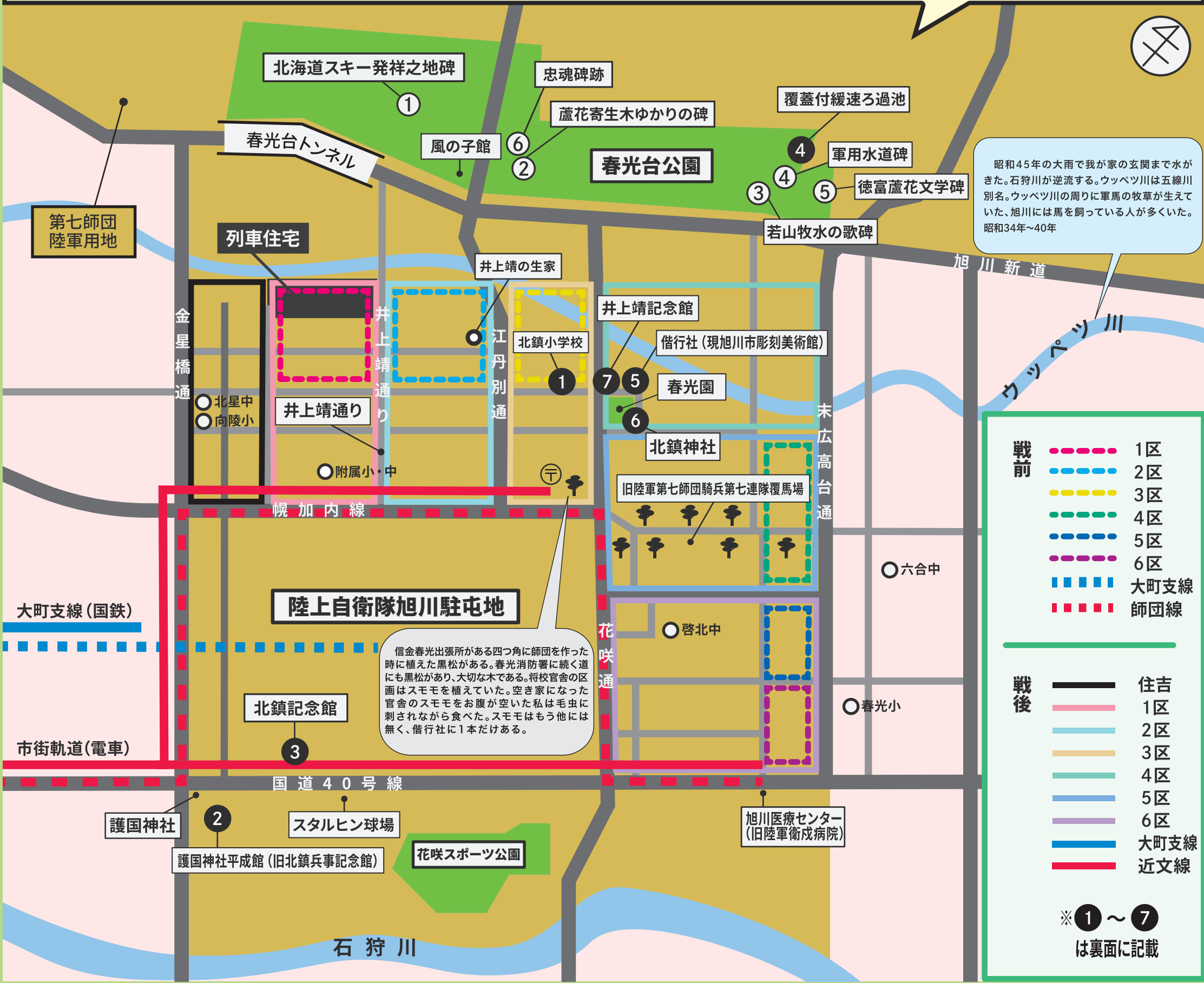
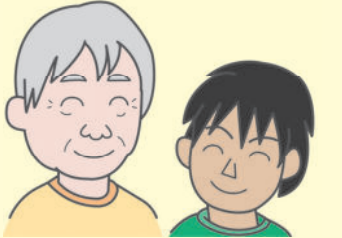


●信金の所まで、チンチン電車が有り、師団司令部の門が有りましたね。今は北鎮記念館に移設されました。

●私の父は、国鉄を定年退職して、春光町2区7条の旧軍隊宿舎だった物件を買取り定住することになりました。かなり大きな宿舎でしたから、幹部宿舎だったのでしょうか。昔の自宅を懐かしく思い出しました。

●今の井上靖通りは私が旭川に来た頃はただのただっ広い通りでした。その昔将校さん達の騎馬隊の通りだったそうです。私達の住む春光町は軍都旭川の象徴の様な町だったのですね。

●旭川の馬糞の匂いエピソードは旭川駅前の倉庫群の前の通り、今の大雪地ビールのあたりの話を聞いた覚えがあります。祖父が語っていました。



戦前
1区
2区
3区
4区
5区
6区
大町支線
師団線

戦後
住吉
1区
2区
3区
4区
5区
6区
大町支線
近文線

※①～⑦
は裏面に記載



列車住宅搬送



列車住宅通景

① 北鎮小学校の歴史

開校の経緯

明治34年旧第七師団の将校子弟教育所(現在の校舎と道路をはさんで反対側に位置する)として発足し、昭和20年の終戦後、軍の解体とともに一時、学校を閉鎖(校舎は連合軍が接収)します。その間は市内の大有小学校に間借りし、昭和21年9月に本校舎復帰となります。昭和26年2月8日に全校舎焼失し、木造モルタル校舎となり、昭和56年1月に現在の校舎となりました。

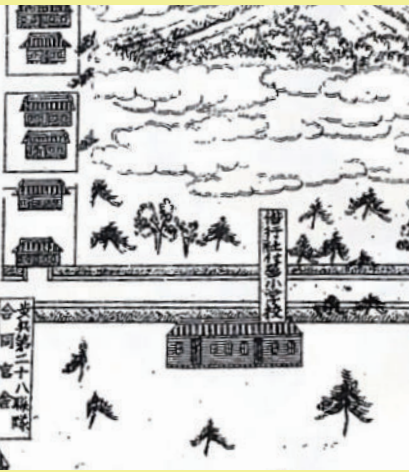
学校名

旧第七師団の将校子弟学校でもあったので「北の守りを固める」という意味から「北鎮」と名付けました。師団偕行社が経営。北の学習院と呼ばれていました。

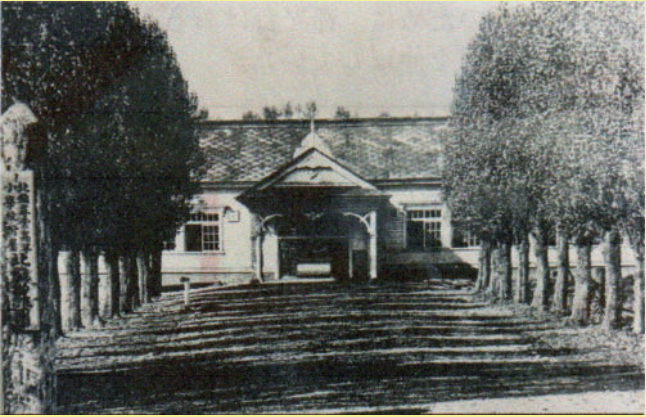
開校当時 児童数35名

沿革

明治34年 1月	旧第七師団私設教育所として開校
2月15日	偕行社附屬北鎮尋常高等学校として私設認可
明治35年 4月 8日	第1回卒業式
明治41年 8月31日	新校舎落成(ルネッサン式・木造平屋建・白色塗装)
明治42年 2月	上原師団長が2組のスキーを寄贈、翌年さらに20数組を寄贈
明治44年 3月31日	校舎・教具類を旭川町に寄付
明治44年 4月 1日	旭川町立北鎮尋常高等学校と改称
明治45年12月	スキー学習開始
大正11年 7月15日	皇太子殿下本道行啓に際し、浜田東宮武官本校に御差遣
大正13年	女兒校服制定
昭和 3年 4月 1日	授業料撤廃
昭和 6年	プール設置
昭和 7年 7月 5日	50mプールに拡張
昭和 7年 8月17日	澄宮(三笠宮)殿下台臨 本校運動会台覧
昭和 8年 9月 2日	校歌制定
昭和10年	男児制服制定
昭和16年 4月 1日	旭川市立北鎮国民学校と改称(国家主義教育濃厚となる)



一代目校舎
(現在の校舎と道路をはさんで反対側に位置する)



二代目校舎

当時、本道の建物はバラック式(廃材を活用した簡易式建て方)がほとんどで、煉瓦の土台に白壺の壁は、道内唯一を誇る堂々たる校舎でした。

小学校のプール

昭和6年の木枠のプール。北鎮小学校にプールができたということで当時は大きな話題となりました。その頃はまだ底は玉石だったため泳ぐと水が濁り、また川の水を引き込んでいたこともあり、プール掃除をするたびにバケツいっぱいのフナやウグイが採れました。これを肴に飲んだビールの味は今も忘れません。

その後、コンクリートで補修され、水道の水を入れるようになりました。



昭和初期の運動会の風景



運動会競技「ガマン会」

両手に鉄砲を持ち、長時間耐えた者が勝ちとなる苦しい競技です。(後ろに見えるのは時計台で、同窓生が自主的に作成し運動会に向けて奉仕しました)



運動会の入場行進(昭和初期)

紅白の応援団長が旗を持ち、口バに乗って入場行進。この頃、北鎮小学校には厩舎があり、口バを育てていました。



兵隊ごっこ

男子は鉄砲を持ち、ハイノウを背負って、模型の戦車や飛行機まで使い、華々しく行いました。

全国に先駆けてのスキー学習開始



北鎮小学校では、明治42、3年に師団長よりスキーの寄贈を受け、明治45年頃には教科に取り入れていました。日本初のスキー授業と思われる。スキー学習のため春光台や鷹栖の半面山まで足を延ばしていました。

② 護国神社平成館(旧北鎮兵事記念館)

旧北鎮兵事記念館は、1934年(昭和9年)旧陸軍第七師団によって建設、鉄筋コンクリート造による帝冠様式の建物で、国の登録有形文化財にもなっています。屯田兵や日露戦争など、師団の戦歴・戦利品等を展示していましたが、太平洋戦争敗戦直後、軍にまつわる資料は全て処分され、他の展示品も戦後の混乱の中で散逸してしまいました。建物は一時期、旭川市の郷土博物館として利用されていましたが、現在は「平成館」として護国神社の所有になっています。



③ 北鎮記念館

1962年(昭和37年)頃、現在の陸上自衛隊第2師団司令部に、コザック兵の軍刀や終戦直後に処分されたはずの「第七師団史」全編が持ち込まれ、その後も続々と市民から戦前の物品が寄せられて来ました。このため第2師団は遠軽駐屯地の空家を旭川駐屯地内に移築し「北鎮記念館」として開館します。ここには旧北鎮兵事記念館に展示されていた日露戦争旅順攻撃の戦利品であるピアノも展示されています。(凱旋以来ステッセル將軍夫人のピアノと呼ばれていました)

現在の建物は旧七師団の兵器庫外観をイメージし、2007年(平成19年)に新築開館しました。



① 北海道スキー発祥之地碑
明治45年、春光台においてオーストリア人の軍人レルヒ中佐が、旧第七師団の将校や民間人に近代スキー技術を直接指導したことをうけ、この地が北海道における近代スキーの発祥の地として昭和41年健立されました。



② 蘆花寄生木ゆかりの碑



③ 若山牧水の歌碑



④ 軍用水道碑



⑤ 徳富蘆花文学碑

⑥ 忠魂碑跡



※現在の慰霊碑は花咲スポーツ公園内にあります。



当初の忠魂碑

表面の地図の碑

④ 覆蓋付緩速ろ過池(ふくがいつきかんそくろかち)

1908年(明治41年)、衛戍地にて腸チフスが発生した事から第七師団では軍用水道の整備を進め、1913年(大正2年)に完成。旭川で初めてとなる水道施設で、石狩川から取水して春光台に設けられたろ過池にポンプで揚水し、衛戍地内に給水しました。このろ過池は凍結を防ぐために煉瓦700万個を使ってアーチ状に天井まで積み上げ、その上に覆土するという全国的にも珍しい構造をしています。現在も春光台配水場として市民の飲料水を提供しており、全国近代水道百選、北海道土木遺産に選ばれています。



水位調整用バルブ室



水を抜いた時の配水池内部(旭川市水道局資料)

⑤ 旧旭川偕行社(現旭川市彫刻美術館)

明治35年、第七師団衛戍地が完成した記念に、将校たちの社交場として建設されました。設計は陸軍臨時建設部、施工は大倉組です。おもに師団関係者の会議、研修会、講演会、宴会、結婚披露宴、宿泊等に使用されました。終戦後は、進駐軍が一時、将校クラブとして使用し、昭和24年建物は国から旭川市に移管されています。昭和43年にこの建物を博物館に転用するために復元修復工事を実施し、旭川市郷土博物館として、平成6年6月に彫刻美術館となりました。建物は、木造二階建の規模の大きなもので、一階、二階ともに前面をヴェランダとし、柱間を開放しています。正面中央には半円形のペディメント半円形平面の玄関ポーチを付け、また煉瓦積の煙突2本を立ててアクセントとしています。

内部は二階に大広間をもち、玄関正面に設けられた階段室、窓周りに意匠をこらしています。

この建物は、北海道における洋風の本格的なクラブ建築として特徴をもち、意匠も優れていることから、平成元年5月、国の重要文化財の指定を受けています。



⑦ 井上靖記念館

井上靖は明治40年、二区(現・春光6条4丁目)の師団官舎で生まれました。軍医であった父隼雄の従軍により約1年で旭川を離れましたが、母や父が語る5月の旭川の美しさに「私は誰よりも恵まれた出生を持っていると思った」と、生誕の地旭川への思いを記しています。

昭和11年懸賞小説「流転」で千葉亀雄賞受賞、昭和25年「闘牛」によって芥川賞受賞、その他数々の賞を受賞し、昭和51年には文化勲章も受章しています。平成3年83歳で逝去。

井上靖記念館は平成5年開館、平成24年に東京都世田谷区の井上靖邸から書斎・応接間部分の寄贈を受け移設公開されています。

⑥ 護国神社の変遷と北鎮神社

護国神社は第七師団が編成完結した明治35年、練兵場内に「招魂斎場(しょうこんさいじょう)」＝選葬所(ようはいじょ)として創建されたのが始まりで初の招魂祭が実施されました。当時の旭川町主催としては日露戦争後の明治40年に第1回招魂祭が開催されています。(現在の護国神社祭) 明治44年に花咲町1丁目に社殿(2代目)を新築し「招魂社」ととなりましたが、大正5年に「北海道招魂場」と改称し、昭和4年には第1回北海道招魂祭大音楽行進も開催されました。(現在の北海道音楽大行進です) さらに昭和9年に社殿(3代目)を新築し、翌10年に「北海道招魂社」と改称されましたが、この時、旧社殿を偕行社前庭の一角に移設して創建されたのが「北鎮神社」です。偕行社を訪れる将校や来賓が拝礼できるようにしたものと思われます。

北海道招魂社は昭和14年の官令により「北海道護国神社」に改称、さらに戦後の昭和21年に一旦「北海道神社」と改称しましたが昭和26年に再び「北海道護国神社」に戻っています。現在の社殿(4代目)は昭和40年に新築されたもので、北鎮神社も偕行社が復元されて郷土博物館となった昭和43年に護国神社境内に奉還、新築され「北鎮安全神社」となっています。

偕行社前庭の北鎮神社跡は、台座のみが「忠の碑」の台座として現在に残っています。



忠の碑

